

いた ジョニー

五木寛之

海を見ていたジョニー



著者 五木寛之 ひろゆき

発行者 野間省一

定価 360 円

第1刷発行 昭和42年7月28日

発行所 株式会社講談社
東京都文京区音羽 2-12-21
TEL. 東京(942) 1111 <大代表>
振替 東京3930

印刷所 慶昌堂印刷株式会社
製本所 藤沢製本株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

目次

海を見ていたジョニー	7
素敵な脅迫者の肖像	49
盗作狩り	85
C M 稼業	141
私刑の夏	193

著者写真
装幀

佐藤晴雄
秋山忠右
栗本信実
山内 璋

海を見ていたジョニー

海を見ていたジョニ！

1

少年の目の前に、ぬっと褐色の手がさしだされた。

「やあ、^{ヘーイ}ジュンイチ」

喉からでなく、胸の奥からひびく柔らかい低音^{ベス}だった。こんな声は誰にでもだせるものじゃない。白っぽい指の腹を見せて、握手をもとめている黒人の手。

へだれだろう？ まさか——✓

少年は一瞬たじろいだ。その動揺を見ぬいたように、優しい声が囁^{ささや}いた。

「やあ、ジュンイチ。帰ってきたよ。わたしだよ」

カウンターの中で、うつむいて氷を割っていた少年は、おそるおそる顔をあげて相手を見た。

「ジョニー！」

「そうだ。しばらくだったな」

目の前の手を握ろうともせず、少年は口をわずかに開けて、古い友人を眺める。

ジョニーだ。殺されもせずに、かえってきたんだ。去年の夏、ふっと姿を見せなくなった黒人兵のジョニー。おれのジャズの仲間。

「やあ^{ハロー}」

それだけ言うと、そのまま少年は口ごもった。こんな場合に、どう応じればいいのかわからないのだ。お得意の英語も、こうなるとからきし役に立たない。

「やあ、ジョニー」

と、それだけで、後は口の中で何となくごまかす。よくかえってきたな、おれは嬉しいよ、と言ったつもりだ。カウンターごしに、濡れた手で温いジョニーの手をぎゅっと握りしめる。

ジョニーが笑った。コカ・コーラみたいな色をした顔に、まっ白い歯が光った。

「元気そうじゃないか、ジュンイチ」

「ああ。あんたもな」

「そう見えるかね？」

と、ジョニーが真顔できいた。「ほんとにわたしが元気だと思うかい？」

「ああ」

「よく見てくれ、わたしを。ちゃんとまっすぐに見るんだ。さあ」

ジョニーは一歩さがって壁際に立った。真剣な顔だった。まるで銃殺される男みたいなぐあい、だらりと両手をさげ、目をつぶってうなだれる。

少年は驚いて背広姿の黒人を眺めた。米式蹴球の選手にタックルされても軽くはじき返しそうな、堂々たる巨体。少し胴長で、腰幅があつて、まるで黒い牡牛みたいな感じだ。

白っぽく乾いた厚い唇がうごいた。「どうかね？ え？」

「どうって、べつに——」

「そんなはずはない。わたしは変ってしまった。そうだろう？」

「そうは見えないけど」

「いや。そうだ。わたしは駄目になってしまった。すっかり変ってしまったのさ。体中から変な臭いがするし、それに——」

ジョニーは、ちらと店の奥においてある古ピアノのほうへ目をやった。「わたしはもう、ピアノだつて弾けなくなつてしまったのさ。もう、おしまいだ」

「どうしたんだい、ジョニー」

少年はカウンターをくぐつて、黒人兵の腕を引っぱった。部屋の隅のボックス席へ連れて行き、そこに坐らせる。

「酔つてゐるのかい？」

「いや」

「いつかえつてきたんだい？」

「きのうだよ」

「除隊になったのかね」

「また行くんだ」

「いつ？」

「十日後に」

「一時帰休というやつだな」

「そんなところだ」

「どんなふうだった？」

「なにが？」

「戦争さ」

ジョニーは答えるかわりに、かすかに笑っただけだった。少し気味の悪い笑いかただった。

「しばらく休んでなよ。おれは氷を割ってしまうから」

開店^{オプン}の時間がせまっていた。この辺の酒場は、よその街とちがって正午から商売をはじめの
だ。姉の由紀^{ユキ}がやってくる前に、しておかねばならない仕事^{ジョブ}が沢山あった。彼女には危くて、氷を
割らせる仕事はさせるわけにはいかない。姉の由紀は、時々ふっと放心状態になるくせがあった。
いつだったか、手首にまともに氷^{アイ}かきを突き立てた事がある。それ以来、少年は姉に氷を割らせる
のはやめにしたのだ。

割った氷に水をかけながら、ジョニーはいったいどうしたというんだろう、と少年は考えた。と
にかく、彼が無事でいてくれただけでもありがたい。ある日突然、ふっと店に姿を見せなくなっ
てしまい、そのまま二度と現れない兵隊も多いのだ。今夜はジョニーと演奏^{プレイ}ができるかも知れない。

まったく、ひさしぶりだ。六ヵ月、いや、彼がこなくなつたのが去年の夏の終り頃だから、十ヵ月ぶりになる。

少年は洋酒棚の端においてあるトランペットのケースに目をやると、無意識に唇をなめて微笑した。

変つたつて？ 嘘だ。ジョニーはちつとも變つてやしない。ただ、疲れてるだけなんだ。一緒にじっくりと、誰のためにでもない、自分たちだけのためのジャズでもやれば、すぐに元氣をとりもどすだろう。今夜は隣りの店の、あの甘つたるいジューク・ボックスを黙らせてやるんだ。ジョニーのピアノと、おれのトランペットの昔通りの合奏で。

少年の頬に、明かるい血の色がうかんできた。褐色の大男は、テーブルの上に顔を伏せて、眠つたように動かなかつた。高い通風孔から、初夏の光の縞が床にのびていた。少年は体を動かしながら、ジョニーと初めて会つた晩のことを思い出そうとしていた。

2

あれは今から一年以上も前のことだ。少年はトランペットのケースをさげて、海ぞいの遊歩道を歩いていた。港の一部に細長い公園があり、その公園と海との間に広い道があつた。

あたりは暗かつた。海のほうから、四月の生温かい湿つた潮風が吹いていた。街は眠っており、公園の中にも、道路にも、人影はなかつた。

少年は立ちどまって海を見下した。道路の端から数メートル下に、黒く揺れ動く水面がある。その水面に接して、せまい四角な石畳が波に洗われていた。道路から石段を降りてそこへ行けるのだ。干潮の時は、石畳は乾いていた。だが今は、石段の途中までしか行けない時間だ。

この遊歩道には、いくつかのそんな場所があり、そこは少年にとって、いちばん安心できる場所だった。人目につかず、どんな音を立てても文句を言われる気遣いもない。海水のピタピタと鳴る眩^{くら}きと、潮風と、貨物船やタンカーのシルエットと、そして安物のランペットと自分だけだ。

深夜、少年は楽器のケースを抱えて、そこへやってきた。姉と二人でやっているスナック・バーを閉めるのが二時だから、後始末を済ませてくると、いつも二時半過ぎになる。

「あんた、自分に才能があるとも思ってるみたいね」

と、姉の由紀は皮肉な言いかたをした。「その年になって、女の子よりジャズに夢中というのは、何だかおかしいわ。セックスなんかには興味ないって顔をして。淳一、あんた少し変なんじゃない？」

少年は自分を変だと思った事はなかった。変なのは姉の由紀のほうだ。二年前に現地除隊して、ずっと日本に住んでいる若いアメリカ人に入れあげて、売上げを片っぱしから貢^{もう}いでしまう。おかげで仕入れにも苦勞するしまつた。男のほうは、すっかりヒモ気取りで、毎日ぶらぶら遊び暮している。

母親は少年が幼稚園の頃、病気で亡くなっていた。税関吏だった父親は、五年ほど前から精神病院に入院したままだ。高台の住宅地にあった家を売って、港に近い飲食街の一角にスナック・バー

をはじめたのは、姉の由紀の思いつきだった。

店の名前をヘビ・アノ・バーンという。古いピアノが一台おいてあって、客が勝手に弾くようになっていた。

近くのホールに出ているベース弾きの健ちゃんという青年が、仕事の帰りに毎晩やってきた。仲間を連れてきて、好き勝手の演奏をやって遊んで行く。外国船の船員や、キャンプのアメリカの兵隊たちの客の中には、なかなか大したミュージシャンもいた。白や、黒や、黄色や、いろんな人種がヘビ・アノ・バーンへやってきた。

客たちは三つのグループに分かれていた。ジャズが好きな客と、ウィスキーを飲みにくるのと、姉の由紀を目当ての連中だ。

店をはじめた時は、由紀が二十二歳で、少年はまだ中学生だった。それから四年、少年は中学を卒業したが、高校へは進学しなかった。彼はヘビ・アノ・バーンの仕事と、ジャズが気にいって、それ以外の事は、なんにも念頭にない。

ベース弾きの健ちゃんの仲間からもらったトランペットを吹きだして三年目になる。小遣いは全部、レコードとモダン・ジャズ喫茶につきこんできた。街で女の子を引っかけたり、洒落た服を着たり、スポーツカーに夢中になったりするより、ジャズを聴いているほうが、どれだけ素敵だかわかりやしない。マイルズ・デイヴィス、ソニー・ロリンズ、デイジー・ガレスピー、セロニアス・モンク、それだけじゃない。デイキシーも、ビッグ・バンドも、ヴォーカルも、みんな好きだった。

「氣狂いっ子」

と同級生たちは、父親の事にかこつけて少年をからかったが、彼は平氣だった。皆からのけものにされても、ちっとも淋しくなんかない。健ちゃんも親切に教えてくれるし、ヘビ・アノ・バーは少年の城だった。凄いい美人で、頭のいい姉貴もいる。

店を閉めて、楽器のケースを下げて、海ぞいの夜の道を歩いている時、少年は何か広い明かるい世界へ向って歩いているような氣がした。あたりは暗く、犬の子一匹いなくても、彼は雑踏をぬってステージへ急ぐ人氣プレイヤーのような氣分を感じたのだった。

その晩、少年が道路から石段を降りて行くと、先客がいた。暗くてはっきりは見えないが、どうやらクラブ帰りのアベックらしい。

「だれかきたわよ」

と、湿った女の声がした。

「平氣だよ。氣にすんな」

と、男の声が言う。

少年は道路へ上ると、別なステージを探した。もう二カ所ほど、同じような場所があるのだ。一番氣に入った所は占領されていたが、別にそこでなくては、ということはない。

もう一つの場所をのぞく。波が軽い音をたてているだけだった。誰もいないらしい。少年は爪先で階段を踏んで、水面のほうへ降りて行く。途中でポケットから出したビニールの風呂敷をひろげ、楽器のケースをそっと置いた。